日蓮大聖人御書全集

ほっけしんごんしょうれつじ

法華真言勝劣事

新版776～786

法華真言勝劣事

文永元年（'64）7月29日　43歳

東寺の弘法大師空海の所立に云わく「法華経はなお華厳経に劣れり。いかにいわんや大日経等においてをや」云々。慈覚大師円仁・智証大師円珍・安然和尚等云わく「法華経の理は大日経に同じ。印と真言との事においては、これなお劣れるなり」云々〈その所釈は余処にこれを出だす〉。

空海は大日経・菩提心論等に依って十住心を立て、顕

密の勝劣を判ず。その中に「第六に他縁大乗心は法相宗、第七に覚心不生心は三論宗、第八に如実一道心は天台宗、第九に極無自性心は華厳宗、第十に秘密荘厳心は真言宗なり。この所立の次第は浅きより深きに至る。その証文は大日経の住心品と菩提心論とに出ず」と云えり。

しかるに、出だすところの大日経住心品を見て、「他縁大乗」「覚心不生」「極無自性」を尋ぬるに、名目は経文にこれ有り。しかりといえども、「他縁」「覚心」「極無自性」の三句を法相・三論・華厳に配する名目はこ

れ無し。その上、「覚心不生」と「極無自性」との中間に、「如実一道」の文義共にこれ無し。

ただし、この品の初めに「いかんが菩提。謂わく、実のごとく自心を知る」等の文これ有り。この文を取って、この二句の中間に置いて天台宗と名づけ、華厳宗に劣るの由、これを存す。住心品においては、全く文義共にこれ無し。有文有義・無文有義の二句を虧く。信用に及ばず。

菩提心論の文においても、法華・華厳の勝劣すべてこれを見ざる上、この論は竜猛菩薩の論ということ、上古よ

り諍論これ有り。この諍論絶えざる已前に亀鏡に立つることは、竪義の法に背く。

その上、善無畏・金剛智等、評定有って大日経の疏・義釈を作れり。一行阿闍梨の執筆なり。この疏・義釈の中に諸宗の勝劣を判ずるに、法華経と大日経とは広略の異なりと定め畢わんぬ。空海の徳貴しといえども、いかでか先師の義に背くべきやという難、これ強し〈これ安然の難なり〉。これによって、空海の門人これを陳ずるに、かたがた陳答これ有り。あるいは守護経、あるいは六波羅蜜経、

あるいは楞伽経、あるいは金剛頂経等に見ゆと多く会通すれども、総じて難勢を免れず。しかりといえども、東寺の末学等、大師の高徳を恐るるのあいだ、あながちに会通を加えんとすれども、結句、会通の術計これ無く、問答の法に背いて「伝教大師最澄は弘法大師の弟子なり」云々、また「宗論の甲乙等、かたがた論ずることこれ有り」云々。

日蓮案じて云わく、華厳宗の杜順・智儼・法蔵等、法華経の「始見・今見」の文に就いて、「法華と華厳と斉等なり」の義これを存す。その後、澄観、「始・今」の文に依って斉

等の義を存すること、祖師に違せず。その上、一往の弁を加えて、「法華と華厳と斉等なり。ただし、華厳は法華経より先なり。華厳経の時、仏、最初に法慧・功徳林等の大菩薩に対して、出世の本懐これを遂ぐ。しかれども、二乗ならびに下賤の凡夫等は、根機未熟の故にこれを用いず。阿含・方等・般若等の調熟によって、還って華厳経に入らしむ。これを今見の法華経と名づく。大陣を破るに、余残堅からざるがごとし等。しかれば、実に華厳経は法華経に勝れたり」等云々。

本朝において勤操等に値って、この義を習学す。後に天台・真言を学すといえども、旧執改まらざるが故に、この義を存するか。いかにいわんや「華厳経は法華経に勝る」の由は、陳・隋より已前、南三北七、皆この義を存す。天台已後もまた、諸宗この義を存せり。ただ弘法一人にあらざるか。

ただし、澄観、「始見・今見」の文に依って「華厳経は法華経より勝る」と料簡する才覚においては、天台智者大師は涅槃経の「この経、世に出ずるは乃至法華の中のご

とし」等の文に依って、「法華と涅槃と斉等なり」の義を存するのみにあらず、また勝劣の義を存すれば、この才覚を学んでこの義を存するか。この義もし僻案ならば、空海の義もまた僻見なるべきなり。

天台真言の書に云わく「法華経と大日経とは広略の異なり。略とは法華経なり。大日経と斉等の理なりといえども、印・真言はこれを略する故なり。広とは大日経なり。極理を説くのみにあらず、印・真言をも説く故なり」。また「法華経と大日経とに同・劣の二義有り。謂わく

理同事劣なり」。また「二義有り。一には、大日経は五時の摂なり。これ与の義なり。二には、大日経は五時の摂にあらざるなり。これ奪の義なり」。また云わく「法華経は譬えば裸形の猛者のごとし。大日経は甲冑を帯せる猛者なり」等云々。また云わく「印・真言無くんば、その仏を知るべからず」等云々。

日蓮不審して云わく、何をもってこれを知る、理は法華経と大日経と斉等なりということを。

答えて云わく、疏と義釈ならびに慈覚・智証等の所釈に

依るなり。

求めて云わく、これらの三蔵大師等はまた何をもってこれを知るや、理は斉等の義なりと。

答えて云わく、三蔵大師等をば疑うべからず等云々。

難じて云わく、この義、論義の法にあらざる上、仏の遺言に違背す。たしかに経文を出だすべし。もし経文無くんば、義分無かるべし。いかん。

答う。威儀形色経・瑜祇経・観智儀軌等なり。文は口伝すべし。

問うて云わく、法華経に印・真言を略すとは、仏より か、経家よりか、訳者よりか。

答えて云わく、あるいは仏と云い、あるいは経家と云い、あるいは訳者と云うなり。

不審して云わく、仏より真言・印を略して法華経と大日経と理同事勝の義これ有りといわば、このことといずれの経文ぞや。文証の所出を知らず、雅意の浮言ならば、これを用いるべからず。もし経家・訳者よりこれを略すといわば、仏説においては何ぞ理同事勝の釈を作るべきや。

法華経と大日経とは全体斉等なり。能く能く子細を尋ぬべきなり。

私に日蓮云わく、威儀形色経・瑜祇経等の文のごとくんば、仏説においては法華経に印・真言有るか。もししからば、経家・訳者これを略せるか。六波羅蜜経のごときは、経家これを略す。旧訳の仁王経のごときは、訳者これを略せるか。もししからば、天台真言の理同事異の釈は、経家ならびに訳者の時よりの法華経・大日経の勝劣なり。全く仏説の勝劣にあらず。これ天台真言の極みなり。

天台宗の義勢、才覚のためにこの義を難ず。天台真言の僻見かくのごとし。東寺の立つるところの義勢は、しばらくこれを置く。僻見、眼前の故なり。

そもそも天台真言宗の立つるところの理同事勝に二難有り。

一には法華経と大日経と理同の義、その文、全くこれ無し。法華経と大日経と先後いかん。既に義釈に二経の前後これを定め畢わって、法華経は先、大日経は後なりと云えり。もししからば、大日経は法華経の重説なり、流通な

り。一法を両度これを説くが故なり。もし所立のごとくんば、法華経の理を重ねてこれを説くを大日経と云う。しからば則ち、法華経と大日経と敵論の時は、大日経の理これを奪って法華経に付くべし。ただし、大日経の得分は、ただ印・真言ばかりなり。印契は身業、真言は口業なり。身・口のみにして意無くんば、印・真言有るべからず。手・口等を奪って法華経に付け、手無くして印を結び、口無くして真言を誦せば、虚空に印・真言を誦結すべきか、いかん。

裸形の猛者と甲冑を帯せる猛者との譬えのこと。裸形の

猛者の進んで大陣を破ると、甲冑を帯せる猛者の退いて一陣をも破らざるとは、いずれか勝るるや。また猛者は法華経なり、甲冑は大日経なり。猛者無くんば、甲冑何の詮かこれ有らん。これは理同の義を難ずるなり。

次に、事勝の義を難ぜば、「法華経には印・真言無く、大日経には印・真言これ有り」云々。印契・真言の有無に付いて二経の勝劣を定むるに、大日経に印・真言有って法華経にこれ無き故に劣ると云わば、阿含経には世界建立、賢聖の地位これ分明なり。大日経にはこれ無し。彼の経

に有ることがこの経に無きをもって勝劣を判ぜば、大日経は阿含経より劣るか。双観経等には四十八願これ分明なり。大日経にはこれ無し。般若経には十八空これ分明なり。大日経にはこれ無し。これらの諸経に劣ると云うべきか。

また「印・真言無くんば、仏を知るべからず」等云々。今、反詰して云わく、理無くんば仏有るべからず、仏無くんば、印契・真言、一切、徒然と成るべし。

彼難じて云わく、賢聖ならびに四十八願等をば、印・真言

に対すべからず等云々。

今、反詰して云わく、最上の印・真言これ無くんば、法華経は大日経等よりも劣るか。もししからば、法華経には二乗作仏・久遠実成これ有り。大日経にはこれ無し。印・真言と二乗作仏・久遠実成とを対論せば、天地雲泥なり。諸経に印・真言を簡わざるに、大日経にこれを説いて何の詮か有るべきや。二乗もし灰断の執を改めずんば、印・真言も無用なり。一代の聖教に皆二乗を「永く成仏せず」と簡い、したがって大日経にもこれを隔つ。皆成仏まで

こそなからめ、三分が二これを捨て、百分が六十余分得道せずんば、仏の大悲何かせん。およそ理の三千これ有って成仏すと云う上には何の不足か有るべき。成仏においては、痴なる仏、中風の覚者は、これ有るべからず。これをもって案ずるに、印・真言は規模無きか。

また諸経には始成正覚の旨を談じて、三身相即の無始の古仏を顕さず。本無今有の失有れば、大日如来は有名無実なり。寿量品にこの旨を顕す。釈尊は天の一月、諸の仏菩薩は万水に浮かべる影なりと見えたり。委細の旨は

しばらくこれを置く。

また「印・真言無くんば、祈禱有るべからず」云々。これまた、もっての外の僻見なり。過去・現在の諸仏、法華経を離れて成仏すべからず。法華経をもって正覚を成じ給う。法華経の行者を捨て給わば、諸仏還って凡夫と成りたもうべし。恩を知らざるが故なり。また未来の諸仏の中の二乗も、法華経を離れては、永く枯木・敗種なり。今は再生の華果なり。他経の行者と相論をなす時は、華光如来・光明如来等はいずれの方に付くべきや。華厳経等の諸経

の仏菩薩・人天乃至四悪趣等の衆は皆、法華経において一念三千・久遠実成の説を聞いて正覚を成ずべし。いずれの方に付くべきや。

真言宗等と外道ならびに小乗・権大乗の行者等と敵対相論をなすの時は、甲乙知り難し。法華経の行者に対する時は、竜と虎と、師子と兎との闘いのごとく、諍論は分絶えたるものなり。恵亮脳を破るの時、次弟位に即き、相応加持するの時、真済の悪霊伏せらるる等これなり。一向真言の行者は法華経の行者に劣れる証拠これなり。

問うて云わく、義釈の意は、法華経・大日経共に二乗作仏・久遠実成を明かすや、いかん。

答えて云わく、共にこれを明かす。義釈に云わく「この経の『心の実相』は、彼の経の『諸法の実相』なり」云々。また云わく『『本初』はこれ『寿量』の義なり」等云々。

問うて云わく、華厳宗の義に云わく「華厳経には二乗作仏・久遠実成これを明かす」。天台宗はこれを許さず。宗論はしばらくこれを置く。人師を捨てて本経を存せば、華厳経においては二乗作仏・久遠実成の相似の文これ有

りといえども、実にはこれ無し。これをもってこれを思うに、義釈には大日経において二乗作仏・久遠実成を存すといえども、実にはこれ無きか、いかん。

答えて云わく、華厳経のごとく相似の文これ有りといえども、実義これ無きか。

私に云わく、二乗作仏なくんば、四弘誓願満足すべからず。四弘誓願満ぜずんば、また別願も満ずべからず。総別の二願満ぜずんば、衆生の成仏も有り難きか。能く能く意得べし云々。

問うて云わく、大日経の疏に云わく「大日如来は無始無終なり」。遥かに五百塵点に勝れたり、いかん。

答う。毘盧遮那の無始無終なること、華厳・浄名・般若等の諸大乗経にこれを説く。独り大日経のみにあらず。

問うて云わく、もししからば、五百塵点は際限あれば有始有終なり。無始無終は際限なし。しからば則ち法華経は諸経に破せらるるか、いかん。

答えて云わく、他宗の人はこの義を存す。天台一家において、この難を会通する者有り難きか。今、大日経ならび

に諸大乗経の無始無終は、法身の無始無終なり。三身の無始無終にあらず。法華経の五百塵点は、諸大乗経の破せざる伽耶の始成これを破したる五百塵点なり。大日経等の諸大乗経には全くこの義無し。

宝塔の涌現、地涌の涌出、弥勒の疑い、寿量品の初めの三誡四請、弥勒菩薩領解の文に「仏は希有の法を説きたもう。昔よりいまだかつて聞かざるところなり」等の文これなり。大日経六巻ならびに供養法の巻、金剛頂経、蘇悉地経等の諸の真言部の経の中には、いまだ三止四請、

三誡四請、二乗の劫・国・名号、難信難解等の文を見ず。

問うて云わく、五乗の真言、いかん。

答う。いまだ二乗の真言を知らず。四諦・十二因縁の梵語のみ有るなり。また法身平等に会することあらんや。

問うて云わく、慈覚・智証等、理同事勝の義を存す。いかでか、これらの大師等に過ぎんや。

答えて云わく、人をもって人を難ずるは、仏の誡めなり。何ぞ汝、仏の制誡に違背するや。ただ経文をもって勝劣の義を存すべし。

難じて云わく、末学の身として祖師の言に背かば、これを難ぜざらんや。

答う。末学の祖師に違すること、これを難ぜば、何ぞ智証・慈覚の天台・妙楽に違すること、何ぞこれを難ぜざるや。

問うて云わく、相違いかん。

答えて云わく、天台・妙楽の意は「已今当の三説の中に法華経に勝れたる経これ有るべからず。もし法華経に勝れたる経これ有りといわば、一宗の宗義これを壊るべし」

の由これを存す。もし「大日経は法華経に勝る」といわば、天台・妙楽の宗義たちまちに破るべきか。

問うて云わく、天台・妙楽の已今当の宗義は、証拠経文に有りや。

答えて云わく、これ有り。法華経法師品に云わく「我が説くところの経典は無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説くべし。しかもその中において、この法華経は最もこれ難信難解なり」等云々。この経文のごとくんば、五十余年の釈迦の説くところの一切経の内には法華経は

最も第一なり。

難じて云わく、真言師の云わく「法華経は釈迦の説くところの一切経の中に第一なり。大日経は大日如来説くところの経なり」。

答えて云わく、釈迦如来より外に、大日如来、閻浮提において八相成道して大日経を説けるか〈これ一〉。六波羅蜜経に云わく「過去・現在ならびに釈迦牟尼仏の説くところの諸経を分かちて五蔵となし、その中の第五の陀羅尼蔵は真言なり」。真言の経は釈迦如来の所説にあら

ずといわば、経文に違す〈これ二〉。「我が説くところの経典」等の文は、釈迦如来の正直捨方便の説なり。大日如来の証明、分身の諸仏広長舌相の経文なり〈これ三〉。五仏章ことごとく、諸仏皆法華経を第一なりと説き給う〈これ四〉。「要をもってこれを言わば、如来の一切の所有の法乃至皆この経において宣示顕説す」等云々。この経文のごとくんば、法華経は釈迦の説くところの諸経の第一なるのみにあらず、大日如来・十方無量諸仏の諸経の中に法華経第一なり。この外、一仏二仏の説くところの

諸経の中に、法華経に勝れたるの経これ有りと云わば、信用すべからず〈これ五〉。大日経等の諸の真言経の中に、法華経に勝れたる由の経文これ無し〈これ六〉。仏より外の天竺・震旦・日本国の論師・人師の中に、天台大師より外の人師の所釈の中に、一念三千の名目これ無し。もし一念三千を立てざれば、性悪の義これ無し。性悪の義これ無くんば、仏菩薩の普現色身、不動・愛染等の降伏の形、十界の曼荼羅、三十七尊等、本無今有の外道の法に同じきか〈これ七〉。

問うて云わく、七義の中に一々の難勢これ有り。しかりといえども、六義はしばらくこれを置く。第七の義、いかん。華厳の澄観、真言の一行等、皆、性悪の義を存す。何ぞ諸宗にこの義無しと云うや。

答えて云わく、華厳の澄観、真言の一行は、天台の立つるところの義を盗んで自宗の義と成すか。このこと余処に勘えたるがごとし。

問うて云わく、天台大師、玄義の三に云わく「法華は衆経を総括す乃至舌口中に爛る。人情をもって彼の大虚を局

ることなかれ」等云々。釈籤の三に云わく「法華宗極の旨を了せずして、声聞に記するは事相のみにして華厳・般若の融通無礙なるにしかずと謂う。諫暁すれども止まず。舌の爛れんこと何ぞ疑わん乃至已今当の妙、ここにおいて固く迷えり。舌爛れて止まざることは、なおこれ華報なり。謗法の罪は、苦長劫に流る」等云々。

もし天台・妙楽の釈実ならば、南三北七ならびに華厳・法相・三論・東寺の弘法等、舌の爛れんこと何の疑いあらんや。乃至「苦長劫に流る」の者なるか。これはし

ばらくこれを置く。

慈覚・智証等の親りこの宗義を承けたる者、法華経は大日経より劣るの義存すべし。もしその義ならば、この人々の「舌口中に爛る」「苦長劫に流る」はいかん。

答えて云わく、この義は最上の難の義なり。口伝に在り云々。

文永元年甲子七月二十九日、これを記す。

日蓮　花押